

初夏の八ヶ岳

昭和十七年六月

天狗岳より赤岳まで

六月十六日(火)

午後10時45分新宿発。幸ひに誰も遅刻はしなかつたが、ゆざゆざ見送りに来てくれたのみならず、貴重な血の幾百滴であるアルコールと飯盒を貸してくれた佐伯君が見送りの事が何かで、驛員に引張られて説教を喰はされてゐて、我々の出発を見送ることが出来なかったのは、まことにすまない次第であつた。さすがは週末だけあって、客車内は立つ者が居ない程度の入りであつた。

六月十七日(水)

午前4時40分茅野着。直ちに驛を出て歩き出す。驛前にバスの掲示があるのを見ると、一番のバスが午前4時30分、次のが8時発とあるので、バスは断念した。

茅野の町は、目醒めつつあつた。人通りの全くない道を八人が並んで歩いた。

茅野から四軒ばかり歩いた所で、橋を渡つて川の對岸で朝食を撮った。川には製材所があり、大きな水車がかけてあつた。

道は輕い傾斜を増した。街村式の部落が次々と現はれ過ぎ去つた。土藏の多いことと、それが皆くずれかけてゐるのが眼についた。

八ヶ岳が行手に堂々と横はつてゐた。今日中に、あそこを越へて、本沢まで行けるかと、だんだんバネ細くなり出した。

途中の休憩場で、海湯を今朝立つたといふ、老夫婦にあつた。風呂敷包みと、アルパイトのまだ使つたことのないさうな飯盒一つと、黒いかうもり傘とを持つたその男は、私の問に親切に答へてくれた。温泉への道にありさうな詩情であつた。相当急傾斜のジグザグを幾折れかして、200米ばかり登ると相當にこたへた。それからの道は、いよいよ高原らしい、威いの原を通つてゐた。しかし、大分疲れてゐたので、今日中に天狗岳を越えて本沢温泉へ下れるか少しらといふ不安を胸に抱いて歩くのみで、高原のよさを味はふなどといふことは、全然出来なかつた。

間もなく明治湯の入口へ出た()。左すれば明治湯、右へ行けば海湯。石を積んだ上に枝を立てて1丁の様なものを作つてあつたのが、何となくなつかしかった。

明治湯は行かないことにして、海湯へ向ふ。

一里ばかり行って、そろそろ遊ノ湯だらうと言ふ邊で、
道がだらだらと下つて、少し小さな盆地に來た。左の川
の向ふに、新築の二階建の、實に安っぽい温泉宿
の様なものがあつた。()。それが何であるか
確かめないうちに、直ぐ右手の尾根へ上る路にある立札に
「静養、鬼堂に快適、唐澤鉱泉近道、歩いて二十分」
といふ意味のことが大きく書いてあつたので、唐澤
鉱泉をロクに調べもしない中に、その近道なる文
字に眩惑されて、その路を上ることにしてしまつた。
ひどい急坂を喰登十分ばかりで尾根へ出る。尾根
は相當に廣い。しかも平な上に、ひどい湿地か
ある。水がたまつてゐる所もあり、靴がもぐもぐ。高い
尾根上でこんなことがあるのは、どういふわけだらう
といふかつた。この尾根の上は、「池の平」といつて、冬
はスキーをやる所らしい。

尾根をこへて南側を下ると、その下の澤が唐澤であ
る。唐澤に下りまつた所で、水場を見つけて、中食を
する()。實に腹がへつて、握飯が、こんなに
おいしいものだとは、今まで知らなかつた。

食事後小憩出発。唐澤を廻行する。やつと登山
らしくなつたので、皆喜ぶ。のどが渇き次第、所々
には川の水を飲む。

唐澤鉱泉はなかなか大きな旅館である。但し止

宿人はまたそんなに居ない様であつた。こゝで、路を
きいてゆく。

しばらく澤を廻行して、小さな瀧に出る。こゝで路を
左にとる。後で思ふと、それが天狗岳直登と、中山
峠への路との別れ場所であつたらしい。

少し行つた所で、龍君、つかまつた崖の石がくづれて
落ちて來て、横腹に當つた。もう少しの所で、危かつた。
しかし横腹も後まで痛んだそうた。

ぐんぐん登る澤には、横の森林中には路がなかつたが、
中山峠から、四五百米下から、路が現れ出
した。どんどん登ると中山峠へ出た。()

峠では休まないで、隊を整へると、直ちに右手へ
尾根筋を登り出した。少し登つた所が、岩がごろごろ
積み重つてゐる小高い地味であつた。足下には、一ヘク
タール程ある池塘がある。そして、その向ふに天狗
岳がその鼻を突出し、怪奇な岩をもたがへてゐた。
そこで記念撮影後、天狗岳へ向ふ。路を左手
にとる。はひ松の中に踏路があるが、岩とばひ松
との上を歩くので、うっかりすると、足を、つつこむ
おそれがある。

天狗岳への登りにあつた頃から、霧が出始めた。
急に涼しくなる。しかし登りは急だ。あへぎあへぎ
はひ松の根や岩をたよりに登る。苦闘四十分は

かりの後、天狗岳の東岳の頂上についた。皆少し遅れて到着。その頃は、あたりは霧が一面におほひ、とても寒い。疲れてゐる上に寒いので、皆ええがな。そこで、持ってる水で、味噌汁を作ることにした。佐伯君のアルコールでやる。後で入れた玉葱が辛いのかまはず、皆おさぼる。おかげで暖くなった。皮肉なことに、頂上を下る頃になると霧がはれ出した。根石岳との鞍部に下った時は、もうすっかり消えてゐて、西の方に、諏訪湖がえってるた。この天狗岳と根石岳との鞍部には、火山灰の様な石があり、とても白くてきれい。天狗岳の上から見ると、雪にそっくりであつた。

根石岳への登りを少し苦んだ後、頂上からは、急に今までの岩とはちがった。岳樺の林を急ぐ。高原の林の中を歩くのは、私の最も好きなものの一である。

途中雪をかざったり、倒れ木に悩まされ、間もなく夏澤峠へつく。峠は展望はないが、休む為の腰掛やれがあつた。

峠からは相当急な下りを、膝をゆがかせながら参走する様に下った。大分下つてもなかなか本澤温泉に出ない。途中で、硫黄坑の前を通り、しばらく行って、やれと、到着する。()

本澤温泉は、昭和十五年に焼けたので、今新築中であつた。二階と一階とが半分づつ出来上つてゐた。その代り世辭が割に良く、また、他に相客のないのが嬉しかった。まったく、二階の、薄べりをしいた、たゞ、広い雑魚場に落付いた時は、旅愁がそぞろに胸を打つた。

温泉といふのに、かゝはらず、その實、硫黄の冷泉を引いてそれで風呂を焚くのである。しかも今建築中だといふ、ゆへに、三人位しか入れない、小さな、半分土の中にもぐり込んだ様な、どこかの工事場の人夫風呂の様な温泉であつた。しかしやはり温泉は温泉だけあつて、とてもよく暖まり、すっかり疲れが治つたのは、ありがたかつた。

電燈は、貯水池が故障で発電出来ないとかで停電で、百目ロックをつけて、食事をした。おみずはうまくもなかったが、米はやはりおいしかった。

食事後、リュックザックの方付けもロクにしないで、皆寝てしまつた。午前五時からの續けての労働に相当疲れたので、^{オレ}遅くまでしゃべったりする者も居なかつた。

六月十八日(木)

午前四時起床。洗面をする。水が硫黄分を含んでゐて、とてもしぶい。

朝食後直ちに出発。(a.m. 5.10.)。昨日下午った急坂を、今日は登る。そんなに辛いとも思はない中に夏澤山荘に出た。(a.m. 5.59.)。隊を整へて、硫黄岳への路を登る。登るに従って樹界を出て、はみ松帯となる。キバナシヤツナゲその他の高山植物が、岩のかげにうづくまつてゐる。だんだんと展望がひろげてくるにつれて、立ち止って遠い山々を見る度数が多くなる。

ゆつくりゆつくり登って硫黄岳頂上着(7.00)。こゝからの展望はものすごい。かつた。

北より妙高、北ア、乗鞍、御岳、中央、南アの北部、以上西方。東側は北から東にかけて、上信上越境の山々殊に浅間には近くあつた。東に大秩父の黒い姿、南東寄りに霊峰富士。

記念撮影後出発(a.m. 7.20)。硫黄岳から下りきつた尾根の所に硫黄岳石室がある。去年出来た小舎で、本澤温泉と同じ人の経営にかゝる。~~本澤温泉~~しかし今年はまだ開いてなかった。立寄ると休みたくなるので、素通りする。

横岳はちよつとした岩場があるが、――白ペンキで矢印がしてあるので、分りやすい。岩の上を歩くと疲れを忘れるのでありがたい。横岳頂上着午前八時二十分。頂上には、極く新しい、花崗岩の小さい石の棒が立ててあり、その四面に經文が刻んであつた。或ひは横岳の岩の上で風に對する調節がわるく落死したと言はれる人の遺族が、あげたものかも知

れない。

横岳頂上から赤岳石室までは、ずっと白ペンキの矢印がつけてあつて、大変分りやすい。實際あの表示がなかったら、大分迷ふことだらう。横岳から赤岳石室までは、岩の下りであるが、仲々あつて、相當いやになる。それが唯の路なら、いやになる様な事は起らない距離なのだが、白ペンキの表示が、いかにも石室が近い近くにある様なことは、"かり書いてあるの"で、また"な"かもうあつてもいい頃だ"と思ふ様になつて、いやになつてしまふものらしい。

赤岳石室着九時半。石室は、赤岳のぐつと隆起する根本にある。内は相當に荒されてゐて、床が濕つて居り、腰も下せない。リュックザックを置いて、直ちに、赤岳登頂。武田君が十五分、皆が十七分で登つた。頂上は、それこそ三百六十度の展望であるが、濕氣が多く、かすんでゐて、遠くの山はぼ"うとしてゐる。

赤岳の頂上は二つあり、北側のが上が廣く、何の處にあるのか分らないが、人が二人ばかり入れそうなトタン屋根の小舎がある。一番高い所には、山神を祀るらしいお堂がある。南側の頂上には、小さな神官姿の銅像と、多数の、「何々祈願」とか「何何講中」とか、いふ字を刻んだ石が置いてある。信仰の對象としての山の姿をありありと見て、フォークロ

アへの心とそかな念願も強く感じた。

赤岳を下って石室で、雪を食べたり、見へる山々の名前を調べたり、味噌汁をわかしたり、昼食をとったりして時間を過ぎた。

午前十一時、再びルックザックをかっさ"上る。石室から直接に、右手(西側)の澤へ下りる路を下りる。しばらく行くと路が崩れてなくなつてゐた。それに落石がひどく、到底八ヶ岳までには下れさうもないので、その降路は中止する。そこで再び石室へ引返すと、ゆるいことに雨が降り出した。雨具をつけて赤岳を再登攀。ルックザックを背負つてゐるので、大分辛い。それでも二十五分ばかりで登頂。赤岳頂上の南側の岩場の途中に路を見付け、それを下る。やつとのことで、赤岳と阿彌陀岳との鞍部に出、残雪の上を滑って澤を下る。北西向の澤だけあつて大分雪が積つて居り、杖を持つてゐる相馬君や龍君や私は、グリセードを楽々だが、他の人達は、大分、すべつて轉んで下つた様だつた。澤を下りきつた時が午後二時。五時何分かの列車に間に合はせようと、スピードを上げて急ぐ。雨が降つてゐると、腹がすいてゐると、時間が足りないのと、皆朗らかでない。一里ばかり下つた所に、小舎がある。中、行者小舎といふものだらう。

それに来たころは空腹はなほ大きく、歩くとふらふらする。そこで、しばらく歩いて見付けた岩の下で食事をする。ルックザックを下さな"いで握飯を一つ食べ終ると直ちに、霖雨の山路にとひ"ぬした。もう三時。あと二時間ばかり。急がなくてはと"いふので、それから、二時間といふものは、急ぎに急いだ。歩くといふよりも、体を前に倒して、それを支へる爲に足を前に出すといふ工夫である。

製材所までは、澤の奥中の路で、木の中を通るが、それをすむると、いはゆる八ヶ岳の裾裾野。気持ちのよい高原気分のする路である。私は雨の降る中も、高原をさまよふのは、最も好きなものの一つなのであるが、この時は、そんなことは、も頭考へないで急いだ。一時間半ばかりの後、八ヶ岳修練農場着。もう到底五時何分の列車には間に合はない。いやそれよりも、六時何分とかのにも間に合はないかも知れぬ。それに乗ると、今夜十一時近くには八王子着。最後の列車は八時何分ので、それは、明朝五時に新宿に着く。修練農場の女の人や事務所で聞いた所、八時から六時五分に、裾野行のバスが出るとのこと。ちやうど、それがうまく時間にあふるので、八手に行くことにする。時間がたつぷりあるので、俄然ゆつくりとなる。

五十分ばかり歩いた後 八手着。

柳澤、茅野間のバスは、所に似合はぬモダンなバス
であった。

六時三十分頃 茅野驛前着。直ちに驛の構内に入る。

六時四十分発。皆グウグウ寝てしまった。

十時五十分 八王子着。省線電車で東京へ。

(村山 記)

参加者